

流通時温室ガス排出量 照準

「スコープ3」算定着手



モデルプラントを設定してオペレーション改善に取り組む予定の海南工場（和歌山県海南市）

和歌山セイカHD 要請に先駆け実施

【和歌山】和歌山セイカホールディングス（和歌山市、竹田純久社長）は、原材料や製品の流通過程などにおける温室効果ガス（GHG）排出量「スコープ3」の算定に着手した。すでに自社生産活動における排出量「スコープ1、2」の集計を進めており、今春にも2030年の削減目標を詰める。大手企業がサプライチェーン（供給網）全体の排出量を把握・削減する取り組みを加速させる中、今後想定される取引先からの要請に先駆け実施する。

和歌山セイカHDは、イカ海南工場（和歌山県海南市）で1製品まわりの化学プラントを多く抱える。21年7月に安全環境室を設置して、各プラントでエネルギー消費量の可視化を進めてきた。削減目標は今後の事業拡大を見込み、総量ではなく、生産量や売上高を基準とする原単位ベースで設定する見通し。

達成に向けて、22年度にはマザー工場のセ

イカ海南工場（和歌山県海南市）で1製品まわりの化学プラントをモデルとして、オペレーションの改善に取り組む。社内各部門から技術者を集めた改善チームの立ち上げも視野に入れており、効率改善で省エネルギー化とともに生産性向上を狙う。

先行して1月から購入電力の半分に再エネ電力証書付きを導入した。プレミアム相当分

を、プラントの効率改善による省エネや計画運用による契約電力切り下げで賄う考えだ。

セイカは、ポリイミド樹脂の原料となる芳香族ジアミン「DPG」や自動車の電動化などで需要が急増している。

DPGが主力。ポリイミド樹脂は電子機器のフレキシブルプリント基板（FPC）に使われ、第5世代通信（5G）や自動車の電動化などで需要が急増している。

今秋には20年春に完成した和歌山工場（和歌山市）のフル稼働を見込み、生産能力は19年比約1.5倍に高まる。